



鳥獣研究室の活躍に期待

支所長 今村 浩人

平成9年4月1日付けで九州支所に待望の「鳥獣研究室」が新設された。大変喜ばしいことである。ここに至るまで研究室新設にご尽力いただいた各方面の多くの方々に心からの御礼を申し上げるものである。

近年、九州地域の林業地帯でシカの害が急速に増加している。九州地区林業試験研究機関連絡協議会や熊本営林局が主宰する九州林政連絡協議会などを通じて、各県から森林総研九州支所における鳥獣部門の研究室の新設についての強い要望が毎年出され、林野庁への重要な要望事項として取り上げられてきたことは周知のとおりである。

九州地域は気候が温暖なこともあり、これまでも森林の病虫害が多発し、台風被害と並んで関係者を困らせてきたが、シカ被害は急速に拡大しつつあるだけにこのままでは林業関係者の意欲にまで影響しかねない重大問題になってきており、この意味からも「鳥獣研究室」の新設は誠に時宜を得たものである。

ところで、我が国の林業・林産業はこれまでになく厳しい局面を迎えており、産業としての

存続には多くの問題をかかえている。一方、地球規模では森林面積の減少が人類の存続を脅かす大問題に発展している。これをうけて、林業と環境保全の両面への貢献という我々の研究もこれまでにない重要な局面を迎えている。

シカ対策は焦眉の急を要する大問題であるが、いうまでもなく「鳥獣研究室」は他の多くの森林動物をも扱うことになる。鳥獣をある面では森林への加害者として、またある面では保全すべき対象として扱うことになるだろうが、いずれにしても森林・林業の研究の一環として問題にするところに大きな意義がある。

このように鳥獣はこれからもますます重要な研究対象になるであろう。国の財政が厳しい折から新設が認められた「鳥獣研究室」には大きな期待がかかっている。しかしながら数限られた研究者の活動には限度があることも確かである。これからは、地域の情報ネットワークをはじめ協力体制の充実が不可欠である。関係各位のこれまで以上のご支援を切にお願いする次第である。

鳥獣研究の新たな展開に向けて

鳥獣研究室 小泉 透

1. はじめに

本年4月1日付けで九州支所に鳥獣研究室が設置されました。九州地域は暖温帯から亜熱帯性気候のもとで常緑広葉樹林をはじめとした多様な森林が分布していますが、戦後の拡大造林を契機として天然林の減少と人工林の拡大が急速に進み、現在森林の50%以上がスギ・ヒノキを中心とした人工林となっています。このため、人工林における鳥獣害が深刻な林業問題に発展する一方で、天然林に生息する野生鳥獣の保護がクローズアップされるようになってきました。今回の研究室設置は、野生鳥獣による被害の防除やこれらの種の保全を考える上で九州地域がきわめて重要な位置にあることを示しています。

ここでは、九州地域の野生鳥獣の特徴を概観しながら、鳥獣研究室がこれから取り組むべき課題について紹介したいと思います。

2. 九州地域の鳥獣相の特徴

動物地理からみると、日本は旧北区と東洋区の2つの動物地理区にまたがった位置にあります。旧北区はユーラシアの北部一帯を占め、温帯から寒帯に起源をもつ種類が主体になっています。東洋区は中国南部からヒマラヤの南斜面、東南アジア地域を含み、亜熱帯から熱帯域に起源をもつ種類が主体となっています。この2つの動物地理区の境界が（分類群によって多少異なりますが）トカラ海峡にあり、渡瀬（わたせ）線と呼ばれています。たとえば、アカネズミやニホンジカ、ニホンザルなどは渡瀬線以南には生息していません（ケラマジカは17世紀に九州南部から移入したものです）。逆に、クビワオオコウモリ、オナガジネズミなどの哺乳類やオオクイナ、リュウキュウヨシゴイ、ミフウズラなどの鳥類は台湾や東南アジアにも生息していますが九州には生息していません。また、九州地

域は渡り鳥のコースにあたっており、朝鮮半島を経由したり東南アジアから琉球列島沿いに北上してやって来るさまざまな渡り鳥の中継地として重要な位置にあります。

日本列島は大陸と連続したり孤立したりしながら成立してきましたので、日本の動物相は大陸の影響を受けながらも固有種の多いことが特徴となっています。このような傾向は九州地域でより顕著に見られます。対馬にはチョウセンイタチやツシマヤマネコなど他の地域にはいない大陸系の種が生息しており、朝鮮方面の影響を受けて種構成がやや異なっています。さらに、南西諸島は長い孤立の歴史をもち、そこで生き残ったアマミノクロウサギ、トゲネズミ、ケナガネズミ、イリオモテヤマネコ、ノグチゲラ、ヤンバルクイナ、ルリカケス、アマミヤマシギなどはこれらの島に固有な種となりました。その一方で、屋久島から先島諸島にかけて分布するアカヒゲは、繁殖する地域によって形態や生活史が異なっています。

このように、九州地域の鳥獣相は南と北の要素や大陸と島の要素を含んできわめて特異な位置を占めており、九州支所においてもこうした特徴を踏まえて研究を進めていく必要があります。

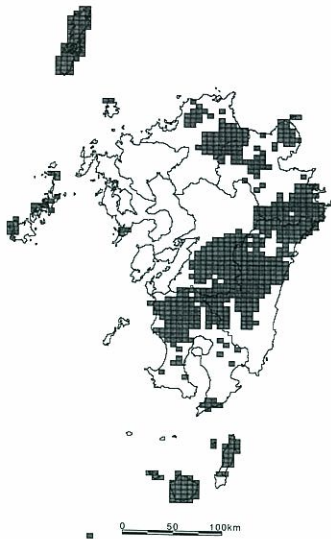
3. 被害防除

ニホンジカは現在最も深刻な森林被害を引き起こしており、全国各地で被害防除の取り組みが行われています。ニホンジカはベトナムからウスリー地方にかけて分布し、国内に限っても慶良間列島（北緯26度）から北海道（北緯45度）にいたる広い地域に生息しています。単一の種としてはきわめて多様な環境に適応していることがわかります。

最近、スギ・ヒノキの食害が関東地方では秋

～冬に限定して発生するのに対して九州地方では春～夏あるいは一年中発生しており、同じ九州の中でも枝葉だけが食害されるケースや枝葉に加えて樹皮が食害されるケースなどさまざまなバリエーションがあることが分かってきました。この他、個体数の変動パターンや社会構造も関東以北と異なる結果が報告されるようになってきました。多様な環境に適応した結果、生活も多様化してきたようです。

まさに「所変わればシカ変わる」わけで、被害防除技術も九州地域の実情に応じて開発していく必要があります。



図一 現在のニホンジカの分布（沖縄県を除く）
（民有林・国有林シカ対策担当者連絡会作成）

4. 種の保全

生物多様性の保全が国際的に叫ばれるようになり、1991年に環境庁は「日本の絶滅のおそれのある野生生物」を発表しました。鳥類・哺乳類では絶滅種を除き169種と13の地域個体群が絶滅のおそれがあると記載されました。この内、九州地域で記録されているものは104種と2つの地域個体群で全体の63%を占め、その多くが南西諸島に集中しています。九州地域における野生鳥獣の保全が重要視される理由がここにあります。隔離された小集団は生態的に脆弱で、

個体数の偶然的変動、気象などの環境変動、遺伝的多様性の減少、寄生、病気、捕食者などの影響を受けて絶滅に至りやすいことが知られています。

九州地域の希少種では、このような集団の脆弱性やそれを回避するための生態的なシステムに関する研究はまだ始まったばかりですが、こうした成果を自然保護区の設定、特に核心地域（コアエリア）や緩衝地域（バッファゾーン）の具体的なガイドラインの設定、へと発展させることが求められています。



図一 2 アカヒゲ(国の天然記念物に指定されています) (吉田成章撮影)

5. おわりに

被害防除も希少種保全もここで一括して論じるほど単純な問題ではありませんが、こうした問題を通じて森林環境の変動が我々の想像以上に野生鳥獣に大きな影響を及ぼしていることを改めて考える必要があります。鳥や獣の目で見ると、現存植生図や森林利用区分図はどのように色分けされるのでしょうか。これまで九州支所が取り組んできた「暖温帯・亜熱帯地域の森林管理技術の高度化」という研究問題に野生鳥獣の視点を付け加えることによって、森林管理技術の開発に新たな局面を切り開いていきたいと考えています。

最後に、研究室の設置にあたりましてご支援いただきました多くの方々に改めてお礼申し上げますとともに、今後ともご協力ご指導いただきますようお願いいたします。

害虫シリーズ(11)

マダクロホシタマムシ

タマムシの仲間には日本から約200種知られており、その名の通り多くは宝石のような光沢と色彩を放つ昆虫です。マダクロホシタマムシも小さいながら(体長10mm内外)、メタリックグリーンを基調とし、美麗種といってよいでしょう。

この虫はスギ・ヒノキの害虫です。とはいっても健康な木を加害するわけではありません。加害の対象は、乾燥や潮害などで弱った木です。また新設された林道沿いの木や、一部伐採で新たにできた林縁木などにも被害がやすいことが知られています。春に羽化した成虫は、こうした木の樹皮下に産卵し、かえった幼虫が形成層の部分を食べ進みます。十分食べた幼虫は材内で越冬し、翌春成虫となって木の外へ飛び出していきます。

弱った木を好むということは、伐倒間もない木や風倒直後の木もねらわれやすいということです。事実、1991年の台風19号で生じた膨大な数の風倒木の樹皮下にはこの虫がよく見られ

ました。また「葉枯らし」といって、伐倒木を林内に放置して乾燥させる場合にも、ヒメスギカミキリや種々のキクイムシなどとともに、本種を警戒しなくてはなりません。



写真 マダクロホシタマムシの成虫
(昆虫研究室 牧野 俊一)

連絡調整室から

- 1) 九州地区林試協林業機械分科会が3月3～4日に本所作業技術科長柴田順一を専門官として招き、福岡県森林林業技術センターで開催され、低コスト伐出技術確立に関する調査、高性能林業機械の導入状況と導入後の問題点等について討議されました。
- 2) 4月24日、地域重要新技術開発「風害発生危険地域の判定及び風害に抵抗力のある森林施業手法の解明」(7～9年)の研究推進会議が九州支所大会議室で開催され、進捗状況と、最終年度に向けた研究計画が討議されました。
- 3) 平成9年度九州地区研究担当者会議及び九州支所研究発表会は、9月2～4日に熊本厚生年金会館で開催される予定です。また、9月24、

25日に秋季場所長会議、10月14日にブロック会議を予定しています。

- 4) 今年には森林総合研究所九州支所の50周年にあたるため、11月から12月にかけて記念行事を予定しています。

九州の森と林業 No.40 平成9年6月1日
編集 農林水産省 林野庁
森林総合研究所九州支所
〒860 熊本市黒髪4丁目11番16号
TEL (096) 343-3168
FAX (096) 344-5054
URL=<http://fkuma.ffpri-kys.affrc.go.jp/>